

平成 2 7 年 4 月 9 日現在

機関番号：1 3 1 0 1

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2013～2014

課題番号：2 5 8 8 4 0 2 5

研究課題名（和文）文化と啓蒙の観点を中心とするウィットゲンシュタインの倫理学の解明

研究課題名（英文）A Elucidation of Wittgenstein's Ethics in Light of Culture and Enlightenment

研究代表者

古田 徹也（FURUTA, Tetsuya）

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授

研究者番号：0 0 7 1 0 3 9 4

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究では、以下に示す通り、文化と啓蒙の観点からウィットゲンシュタイン哲学の倫理的側面を取り出すことを試みた。まず、「行為」や「技術」、「文化」という概念をめぐるウィットゲンシュタインの思考に関連する文献資料の調査を行った。また、そのうえで、研究会や学会などにおいて、ウィットゲンシュタイン解釈をめぐって他の研究者と活発な意見交換を行った。

以上の研究の成果は、著書や論文、発表、講演等のかたちで公開した。

研究成果の概要（英文）：As indicated below, I investigated the ethical side of Wittgenstein's philosophy in light of culture and enlightenment. First, I investigated the document materials that concern Wittgenstein's thoughts on the concept of "action", "technique", and "culture". Further, I had lively exchanges of views about Wittgenstein's thoughts at academic meetings and conferences.

I announced the results of these investigations by books, research papers, and oral presentations.

研究分野：西洋現代哲学・倫理学

キーワード：ウィットゲンシュタイン 言語哲学 分析哲学 倫理学 文化 啓蒙 行為 技術

1. 研究開始当初の背景

ルートウィヒ・ウィトゲンシュタインの名が日本で知られるようになった当初、彼は論理学者や論理実証主義者として紹介されていた。現在ではそうした捉え方はほぼ姿を消したと言ってもいいが、なお、抽象的な概念の分析に徹する分析哲学者としてのウィトゲンシュタイン像が有力である。すなわち、哲学の役割とは純粋に抽象的な問題に対する我々の論理的な混乱を除去すること、いわば、論理的なパズルを解くことに尽きるとした上で、自らその作業を実践した哲学者としてウィトゲンシュタインを捉える見方である。

しかし、「哲学の義務とは、誤解から生じた幻想を除去することである」(Kritik der reinen Vernunft, 1781/1787)と述べたカントが、個々人の啓蒙と社会の変革に対して哲学が果たしうる役割を信じたように、ウィトゲンシュタインもまた、哲学が単なる個別の論理的なパズルを除去することに終始するものであってはならないと考えていた。哲学が陥りがちな些末さに対する批判と警戒、そして、その裏表として、哲学が本来果たすべき啓蒙の役割、社会の重要問題について我々の考える力を進歩させる役割、についての希望と自負が、ウィトゲンシュタインの思考にはあらわれている。また、もう一つ、重要なポイントとして、ウィトゲンシュタインがしばしば同時代の社会や文化の状況に対して厳しい目を向けていること、しかもそれが、英語圏の分析哲学的な観点というよりも、彼の出身であるウィーン文化圏において当時盛んであった観念に基づいている、ということを示すことができる。

まとめるならば、ウィトゲンシュタインを「純粋に抽象的な問題を扱う分析哲学者」として捉える従来の見方とは裏腹に、ウィトゲンシュタイン自身は啓蒙や社会・文化批判の役割も哲学に見出しており、また、彼の思考が、当時のウィーンの具体的な文化的基盤を背景に展開されていることも確かである。こうした従来の見方と実相とのギャップを埋めることが、ウィトゲンシュタイン研究を前進させ、彼の哲学を統一的に理解するうえで不可欠と思われた。

2. 研究の目的

本研究は、ウィトゲンシュタインを「純粋に抽象的な問題を扱う分析哲学者」として捉える従来の見方に抗して、彼の議論の再構成に「文化」と「啓蒙」の観点を取り戻し、その倫理的側面を明確に取り出すことを目指すものである。

その最初の鍵として本研究が着目するのは、「行為」や「技術」という観点である。本研究ではまず、論理的必然性にすらアブリ

オリな形而上学的源泉を求めず、人間の個別の生活と結びついた具体的な「行為」や「技術」として数学の営み等を照らし出していくウィトゲンシュタインの議論を追うことで、哲学が抽象的次元を超えて現実の社会・文化・歴史へと入り行く、その最初の地点を見定めることを目指す。

次に、本研究が着目するのは、いわゆる「世紀末ウィーン」文化圏における言語論や文化論である。これらを研究し、その特徴を取り出すことによって、ウィトゲンシュタインの議論とが具体的にどのような点で共通し、それが彼の議論の理解にどのように資するのか、その道筋を見出すことを目標にする。また、現在に至る有力なウィトゲンシュタイン研究者の議論を踏まえた上で、文化という非抽象的な次元をめぐるウィトゲンシュタインの視座がどのようなものか、また、哲学が果たすべき啓蒙の役割として彼が考えたものが具体的にどのように特徴づけられるかを探る。

以上の研究を通して、ウィトゲンシュタイン哲学の統一像を探り、彼に関する研究という一分野を進展させるだけでなく、彼の議論を現代的諸課題へと架橋し、哲学を学ぶ意味はどこにあるのか、哲学の意義とは何かということを示すことにより、広く社会・国民に貢献する成果を発信することが、本研究全体の最終的な目的である。

3. 研究の方法

(1) ウィトゲンシュタイン哲学に関する一次文献および二次文献、さらに、「世紀末ウィーン」の言語論や文化論に関連する文献資料を広く収集し、調査・読解を行った。

主な対象とした文献資料は以下の通りである。

- ・ *Wittgenstein's Lectures on the Foundations of Mathematics*, Cambridge 1939, edited by C. Diamond, The University of Chicago Press, 1986.
- ・ Wittgenstein, L., *Last Writings on the Philosophy of Psychology*, Vol. I, edited by G.H. von Wright and H. Nyman, Basil Blackwell, 1982.
- ・ Wittgenstein, L., *Last Writings on the Philosophy of Psychology*, Vol. II, The Inner and the Outer, edited by G.H. von Wright and H. Nyman, Blackwell, 1992.
- ・ Cavell, S., *The Claim of Reason: Wittgenstein, Skepticism, Morality, and Tragedy*, Oxford University Press, 1979.
- ・ Wiggins, D., "Truth, Invention and the Meaning of Life," in his *Needs, Value and Truth*, 2nd ed. Blackwell, 1991, 87-138.
- ・ Mauthner, F., *Beiträge zu einer Kritik der Sprache*, Vol. I-III, Nabu Press,

2010.

・Kraus, K., Die Sprache, Suhrkamp, 1987.

(2) 他のウィトゲンシュタイン研究者と共に「Wittgenstein 研究会」を組織し、研究ネットワークを構築した。また、同研究会で月1回の会合をもち、文献の購読や研究発表、討論等を行った。

(3) 首都圏在住の哲学研究者、大学院生らと、インターネットのビデオチャット・サービス「Google+ “ハングアウト”」を用いてウィトゲンシュタインの原典を輪読する機会を月1回程度設け、研究の深化を図った。

(4) 日本哲学会、日本倫理学会等の全国大会に参加し、討論や交流を行った。

4. 研究成果

(1) 「行為」という観点にかかわる研究の成果としては、単著『それは私がしたことなのか：行為の哲学入門』を刊行した。本書では、「手をあげることから手があがることを引くと、後に何が残るのか」というウィトゲンシュタインの問いを起点にして、行為やその意図の本性を提示する試みを行い、そのなかで、「はじめに行為ありき」というウィトゲンシュタインのモットーを、「心の働きとしての意志」と「身体運動」を峻別するデカルト的心身二元論や、あるいは物的一元論に抗するものとして位置づける議論を行った。そのうえで、本書の結論部において、行為という概念が不可避的に、「責任」という概念を中心に倫理学の領域へとつながっていく道筋を示した。

以上の研究成果は、口頭発表というかたちで、「過失という概念の不具合について：行為の哲学の一断面」および「行為と行為でないものの境界」と題し、それぞれ京都大学と新潟大学で公にした。

(2) 心身二元論モデルや物的一元論モデルとは異なる人間像を提示するウィトゲンシュタイン哲学を跡づける論考として、「心は「存在する」のか：感覚と感情をめぐるウィトゲンシュタインの議論から」(『感性学：触れ合う心・感じる身体』所収)を著し、人間間のコミュニケーションにおいて立ち上がるものとして「心」を捉え直す方途を示した。

なお、この論考と関連するものとして、「ゲーム、嘘、演技：ウィトゲンシュタインにおける human nature」と題する発表を京都大学にて行った。同発表では、嘘や振りといった「悪徳」と人間本性をめぐるウィトゲンシュタインの議論を輪郭づけ、その倫理的側面を浮き彫りにした。

(3) 「技術」という観点にかかわる研究の成

果としては、訳書『ウィトゲンシュタインの講義 数学の基礎篇：ケンブリッジ1939年』を刊行した。これにより、ウィトゲンシュタインが、すぐれて抽象的な領域と見なされがちな論理学や数学に関しても、人間の個別の生活と結びついた具体的な技術という観点からアプローチを行っていることを示した。

(4) ウィトゲンシュタイン哲学と倫理学の連関にかかわるものとしては、デイヴィッド・ウィギンズの論文「真理、発明、人生の意味」を翻訳し、訳者解説を著した。同論文は、ウィトゲンシュタインの『論理哲学論考』の議論や数学基礎論への言及を含み、それが「人生の意味」や「生き方」の問題圏へとつながっていることも示すものである。

(5) 上記「3. 研究の方法」で示したスタンリー・カヴェルの著書をはじめとするウィトゲンシュタイン研究の文献、それから、フリッツ・マウトナーやカール・クラウスの著書をはじめとする世紀末ウィーンの言語論・文化論の調査・読解を進展させた。そのなかで、「形態 (Gestalt)」という観点からウィトゲンシュタイン哲学を統一的に捉える手掛かりを得た。この成果は今後、論文や著書等のかたちで公開していく予定である。

(6) ウィトゲンシュタイン哲学の統一像を捉えるため、日本哲学会において公募ワークショップ「ウィトゲンシュタインの哲学を貫くものと分かつもの」をオーガナイズし、司会を務めた。ウィトゲンシュタインの哲学が「前期」と「後期」に大別されること自体はよく知られているが、その転回とは具体的にどのようなものであるか、また、転回を挟んでも変わらないものがあつたとすればそれは何か、ということは、現在に至るまで論争の的であり続けている。本ワークショップでは、彼の哲学の全体像を掴まえる端緒を開くために、彼において「変化したもの」と「変化しなかったもの」の内実を共に捉える複眼的な視座を探り、フロアも含めて討論を行った。

(7) 以上の成果を広く社会・国民に発信する一環として、共著『科学技術の倫理学 II』を刊行した。本研究代表者は第3章「科学技術化した社会の責任主体」およびコラム「「共同行為」の問題圏」の執筆を担当し、「行為」と「責任」の概念の結びつきをめぐる本研究の成果を現代的諸課題へと架橋することを通して、現代の科学技術化した社会における責任主体のあり方を提言した。同時に、関連する発表「“ やってしまった ” から始まるコミュニケーション：企業・団体による“ 謝罪 ” を題材として」を行い、行為と責任の問題をめぐる企業関係者との意見交換を行った。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

古田 徹也、「『ウィトゲンシュタインの独我論』の構造と意義：永井均著『ウィトゲンシュタインの誤診：『青色本』を掘り崩す』について」、科学哲学、査読有、47(1)、2014、53-66

〔学会発表〕(計4件)

古田 徹也、「“ やってしまった ” から始まるコミュニケーション：企業・団体による“ 謝罪 ” を題材として」、講演会「科学技術者・組織とイノベティブ・コミュニケーション」、三菱電機ビジネス・マネジメント部会・知的生産力専門部会、三菱電機本社、2015.3.27

古田 徹也、「ゲーム、嘘、演技：ウィトゲンシュタインにおける human nature」、ネットワーク日本哲学第五回研究会、京都大学文学部、2015.3.15

古田 徹也、「行為と行為でないものの境界」、第16回新潟哲学思想セミナー(NiiPhiS)、新潟大学人文学部、2014.4.8

古田 徹也、「過失という概念の不具合について：行為の哲学の一断面」、APE ワークショップ「Action, Emotion, and Morality」、京都大学大学院文学研究科応用哲学・倫理学教育研究センター(CAPE)、2014.3.6

〔図書〕(計3件)

古田 徹也 他、梓出版社、第3章「科学技術化した社会の責任主体」、コラム「共同行為」の問題圈、『科学技術の倫理学II』、2015、66-91

古田 徹也 他、東北大学出版会、第7章「心は「存在する」のか：感覚と感情をめぐるウィトゲンシュタインの議論から」、『感性学：触れ合う心・感じる身体』、2014、127-150

古田 徹也、新曜社、『それは私がしたことなのか：行為の哲学入門』、2013、282

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

なし

翻訳(計2件)

古田 徹也・大谷弘(訳)、コーラ・ダイアモンド(編)、講談社学術文庫、『ウィトゲンシュタインの講義 数学の基礎篇：ケンブリッジ1939年』、2015、624

古田 徹也 他(訳)、デイヴィッド・ウィギンズ(著)、勁草書房、「真理、発明、人生の意味」、『ニーズ・価値・真理：ウィギンズ倫理学論文集』所収、2014、139-232

文献紹介(計1件)

古田 徹也、勁草書房、「訳者解題」、『ニーズ・価値・真理：ウィギンズ倫理学論文集』、2014、315-328

書評(計1件)

古田 徹也、ウィトゲンシュタイン著、丘沢静也訳『哲学探究』、科学哲学、47(2)、2014、107-109

オーガナイズ・司会(計1件)

オーガナイズ・司会：古田 徹也、提題者(発表順)：荒畑 靖宏、入江 俊夫、山田 圭一、公募ワークショップ「ウィトゲンシュタインの哲学を貫くものと分かつもの」、日本哲学会 第73回大会、@北海道大学、2014.6.29

6. 研究組織

(1)研究代表者

古田 徹也(FURUTA, Tetsuya)

新潟大学・人文社会・教育科学系・准教授
研究者番号：00710394

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし